

校長通信

Morifun

<卒業式161名巣立つ>

3月1日(月)に卒業式が行われ161名が本校を巣立っていきました。卒業証書授与ではマスクを外してということにしましたが、マスクを着用したままの卒業生も見られました。私としては一人ひとりに手渡すことができたので、より感慨深いものがありました。本来であれば、在校生に見送られて…というのが常ですが、生徒会執行部の7名が代表として見送ってくれました。雨の中駐車場係として奮闘してくれた野球部をはじめ、準備や後片付けに邁進してくれた運動部の皆さんにも感謝します。

式辞「皆さんは司馬遼太郎という作家をご存じだろうか。代表作に『龍馬がゆく』『燃えよ剣』『坂の上の雲』などがあります。数々の歴史小説を書いてきた彼は1996年に亡くなりましたが、『21世紀に生きる君たちへ』という文章を残しました。これは「小学校国語六年」の教科書にも載っているのです。読んだことがあるかもしれません。今更小学生が読むものを伝えて失礼にはならないだろうか、とほんの一瞬頭をかすめました。これほど示唆に富んでいて、時世時節を越えて普遍的に真でありつづけ、人間が社会を営んで生きていくうえで大切にすべき事柄はありません。そう確信しているので、まさに二十一世紀の中心となって生きていく皆さんにその中の言葉を伝えようと思います。

『自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくりだされていない。このため、助け合う、ということが、

人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動の基は、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることも言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。「やさしさ」「おもいやり」「いたわり」「他人の痛みを感じることも」みな似たような言葉である。

これらの言葉は、もともと一つの根から出ている。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならない。その訓練とは、簡単なことだ。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分でつくりあげていきさえすればよい。この根この感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲良しで暮らせる時代になるにちがいない。』

まさにこの混迷の時代を生き抜くための一つの指針となる言葉だと確信しています。そしてもう一つ。

I believe everyone deserves a standing ovation at least once in their lifetime.

『世界中のだれもが、一生に一度はスタンディング・オベーションを受けるべきだ』皆さん一人ひとりが素晴らしい一面を持っています、誰もが称賛されるべき存在であることも忘れないでください。自分に誇りをもって生きてください。』

送辞(2年4組三浦紗弥さん)「私たちにとって、卒業生の皆様と過ごした日々は、常に安心と、信頼に満ち溢れた時間であり、盛岡大学附属高校の生徒としてのあるべき姿を教えていただくことができた貴重な時であったと思います。

みなさんの高校生活は、新型コロナウイルス感染症対策のため、さまざまなことが制限されたものでした。しかし、自分たちで創意工夫し、今できる最大限の努力をするみなさんの姿は、私たちに大きな希望と可能性を示してくださいました。

このような大きな学びの喜びを、今度は私たちが自ら創り出さなければなりません。みなさんがいなくなった後の

学校をみなさんが心配することのないように、私たちのやり方で、盛り上げていきたいと考えております。

今、卒業生のみなさんは、希望に胸を膨らませ、新しい世界へと羽ばたこうとしています。

そんなみなさんの行く道は、みなさんが目指す未来へと続いています。これまで高等学校で経験した多くの学びの喜びを礎にしてさらに輝かしい世界を手に入れられますことをお祈りし、送辞とさせていただきます。』

答辞(3年2組中居早瀬さん)「この三年間、私を支えてくれていたものがあります。それは、仲間の優しさと笑顔です。勉強を教えてくれる仲間、一緒に黒板を消してくれる仲間、教科書を貸してくれる仲間、相談に乗ってくれる仲間、たくさんの優しさに触れ、私は一人じゃないと感じました。新型コロナウイルスの影響により、私たちの高校生活はマスクをつけたまま始まりました。部活の大会や学校行事の規模は縮小され、修学旅行の中止も余儀なくされました。この怒りや不満はどこにぶつければいいのか、いつまで我慢すればいいのか、出口の見えないトンネルをさまよっているような、見たかった景色とは程遠く声を挙げて届かない現実にも何度も頭を抱えました。それでもほんの少しの希望を胸に私たちは前に進んでいきました。たとえコロナウイルスに青春を奪われたとしても、仲間のマスク越しから感じる思い通りの笑顔を見ると安心し、これまでのあたりまえのような日々がどれだけ貴重であったか気づくことができました。「おはよう」から始まる朝の教室も、ともに切磋琢磨した部活動も、クラスに絆が生まれた体育祭や文化祭も、眠気と戦った授業も、ふざけあひくいだらないことで笑い合った何気ない時間も、このあたりまえだった日常が明日から来ることがないと、戻って来ることがないと、そう思うと寂しいという言葉だけでは表しきれません。それでも、仲間と過ごした時間は私たちににとって最高の宝物です。(中略)明日から一人一人、それぞれまた新たな道への挑戦が始まります。この三年間で培った経験、知識、思い出、

全てを背負って、自分の夢に向かって歩いていきます。卒業してもここは私たちの母校です。懐かしくなったら、会いたくなったら、きっとこの盛附に足を運ぶこともあると思います。そのときは、私たちを、また温かい雰囲気でご迎え入れてください。」

はなむけの言葉(山添勝寛理事長)「皆さんの高校生活はコロナ禍の中でスタートしました。この三年間は予防対策の下で諸行事が縮小されるなど従来とは全く異なる学園生活を余儀なくされました。楽しみにしていた修学旅行も中止せざるを得ませんでした。残念でなりません。

しかし、思い出に残る「体育祭」はコロナ対策を徹底し運営にいろいろ工夫を凝らし新しい形で実施にこぎつけました。部活は練習の成果著しく、野球部は令和三年度、夏の甲子園大会でベスト16まで勝ち進み、コロナ禍で打ち沈んだ県民に勇気を与えてくれました。柔道部に陸上部、さらに文化部門の演劇部も大活躍で「盛附」の名をますます高めてくれました。今年度、三年生進学コースが取り組んだ「主権者教育」は各メディア、県政番組で取り上げられ注目されました。このようにこれまでの生徒が経験したことのない諸々の行動制限の中で、生徒、教職員、そしてご家族の皆さんが心をつなげて障害を乗り越え本日の卒業式を迎えました。学校法人理事長としてこの上ない喜びであり誇りであります。

卒業生諸君はこれから、進学、あるいは実社会に羽ばたく人など道は分かれます。しかし、人間として大成するためには欠かせないものがあります。それは失敗したり苦境に立たされてもそこから立ち直る力です。「復元力」「回復力」と言ってもいいでしょう。皆さんは三年間に及ぶコロナとの闘いによって経験的にこの力を身につけたはずです。」

＜卒業礼拝より 2月28日＞

新約聖書 コロサイの信徒への手紙 3章 14節

これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

明日はいよいよ卒業式です。これまでの3年間の経験がこれからの人生の大切な力になっていくと思います。この

3年間を振り返ると、新型コロナウイルスの感染拡大が続いていたことは本当に大きな出来事です。様々な辛い苦しい思いをしてきました、なかなか計画もうまく進まず、先が見えない状況が続きました。この3年間、私たちの社会は色んな感染対策をしてきたわけですが、将来的にこれらが適切であったのか、今後検証されることとなります。高校生の皆さんに多大な犠牲を強いてきたのではないかと、社会の一員として申し訳ない気持ちです。それでもそういう中で皆さんが一生懸命考えてやってきたことが、今後の皆さんの糧になると思います。新型コロナを経験した皆さんの中から新しい言葉を発する人が誕生することを期待しています。

卒業を控える皆さんに改めて聖書の言葉を伝えようとの言葉を選びました。何度も皆さんに愛についてお話してきました。聖書の愛は原文ではアガペーといいます。このアガペーは聖書ではまず第一に神の愛を指しています。私たちから生じている愛というのも神から生じている愛である。だからこそ特別なものとして位置づけられています。このアガペーは私たちの感情だけでなく行動を指す言葉だということもお伝えしてきました。たとえ心情的には苦手な相手でも大切にすることを聖書は愛と呼んでいます。私なりに表現すると、相手の存在をかけがえのないものとして重んじる、大切にすることです。相手のことを好きか嫌いを超えて相手を重んじ尊重する、それをアガペーと呼んでいます。

相手の存在を重んじることが愛だとすると、その反対は相手の存在を軽んじることです。そういう軽んじる姿勢は愛とは反対です。誰かに軽んじられると悲しいし傷つきます。たとえ自分が好きでない相手に対しても軽んじてはいけません。愛するというのは相手を重んじることですが、自分とうまくいっていない相手に対しても、だからといって攻撃したり軽んじたりしない、自分の好き嫌いとか主観的な感情で相手を軽んじたりしないと、自分で心に決めることが愛することに繋がっていきます。

私たちの社会を見ると、互いに互いを軽んじる連鎖というのが色んなところで生じています。そういう連鎖をいかに

に断ち切っていくか。このことを考えると、いつも思い出す聖書の言葉があります。旧約聖書イザヤ書には次のような言葉があります。「わたしの目にあなたは値高く、貴く／わたしはあなたを愛し」これは神がイスラエル民族に贈る言葉ですが、私たち一人ひとりに神が語っている言葉だと受け止めています。神の目から見て私たち一人ひとりが大切な存在だということ、互いを軽んじる連鎖を断ち切るには神の目から見て一人ひとりが大切だということを思い起こすことが大切です。私たちの目には、嫌な人、嫌いな人と見えても、神の目から見れば大切なひとりの人、それを思い起こすことです。かけがえのないというのは、代わりがきかないということ。そして神がそんな我々一人ひとりを愛していることが聖書が語る愛なのです。

この3年間色んな経験をしてきました、学校での勉強、クラブ活動、行事を通して色んなことを身につけて成長してきました。この身に付けてきた本当に大切なことが力を発揮するのは、愛を土台にするときだと聖書は言っています。相手を重んじて大切にしようとする、その姿勢に基づいて大切な誰かのために何かをしようとするとき、ここの身に付けてきたことは大きな力を発揮してくれると思います。愛はこれまで自分達が身に付けてきたことをしっかりと結び合わせる絆です。聖書が伝えるこの愛を心に留めて皆さんが自分のかけがえのない使命を果たしていきまようように、目標と夢に向かって力強く愛を持って生きていくことを祈っています。(花巻教会牧師・鈴木道也先生)

＜ご退職となる先生方＞

3月31日付で退職される先生方をご紹介します。本校の教育にご尽力いただき大変ありがとうございました。先生方の今後のますますご活躍を祈念申し上げます。

ご退職：泉山誠先生(英語) 上田徳良先生(英語・聖書)
小野寺克信先生(英語) 樋口卓子先生(国語)
岩崎正子さん(事務)

紙面の都合で割愛しますが、高大連携進学コースの探究発表会、修学旅行の報告会、特進コースの先輩からのメッセージも滞りなく行われ実りあるものとなりました。